
Death Call

流星

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Death Call

【Nコード】

N2510BA

【作者名】

流星

【あらすじ】

その電話に出たら死ぬ - 最近噂されるようになった通称「死の電話」。高校生の佐藤裕也は死の電話について調べていると偶然あるサイトを見付ける。その掲示板には次に死ぬ人物：友人の名前が書かれていた。

次々と起こる奇妙な変死事件。そしてついには裕也に死の電話が：

：

プロローグ

誰もが寝静まった深夜。いつもと変わらない日常？果たしてそんなものがあると言うのか…？

今この瞬間、いつもの日常は少しずつ変化をさせていつもの日常ではなくなっていていつてことに誰も気付かない。だからこそ……

「17日午後18時…」 右手に持つ携帯から聞こえる謎の男の声。

その声は生きているのかもわからないほど感情がなく、無機質なものの。

「さつきからなんだよお前っ！」
携帯を持つ青年が電話の相手に向かって怒鳴りつける。

青年の名前は「斎藤一樹」高校時代に犯罪を犯し学校を中退。以降は改心もせずに夜の街を仲間と飲み歩く毎日を過ごしていた。

今日もいつものメンバーで飲み歩き、自宅に帰る途中だった。激しい雨が降る中、携帯の着信音が耳に入る。

「あんだよこんな時間によお」
時刻は深夜2時。

多少のイラつきをおぼえながらも一樹はポケットに入っている携帯を取り出す。辺りに人気はなく、蛍光灯の光だけが周囲を照らしていた。

携帯を開くとすぐに疑問の声があがった。

「何だこの番号？」

画面に表示された番号は一樹の知るものではなく非通知。この時点で飲み仲間ではないことがわかる。一瞬切ろうと考えた一樹だが、静かに通話ボタンを押した。

「もしもし…?」

恐る恐る喋りかける。

「17日午後18時…」

「ああ？」

電話に出たのは若い男のようだった。

「17日午後18時…」

「誰だよあんた? 何で俺の番号知ってた」

一樹は素直に疑問を相手にぶつけるが…

「17日午後18時…」

電話から聞こえる言葉に変化はない。何を言っても返ってくるのは同じ言葉を次第に一樹に苛立ちが見え始めた。ついには右手に持つ携帯に向かって怒鳴りつける。

「さつきからなんだよお前っ!」

すると突如相手の言葉が途切れ静寂が辺りを包んだ。聞こえるのは雨の音だけのはずなのに不思議と自分の心臓の音が聞こえる。

それから何分たったのか…もしかしたらまだ1分も経過してないかもしれない。一樹は再び携帯を耳元へ持つてくる……

「17日午後18時…」

やはり携帯から聞こえる声は変わらない。

「だからそれが何だっただよっ?」

「……………」

「何とか言えよっ」

「オマエハシヌオマエハシヌオマエハシヌオマエハシヌオマエハシヌオマエハシヌオマエハシヌ」

一樹は思わず悲鳴をあげ携帯を投げ捨ててしまう。今あいつは何と言った…?

17日午後18に俺が死ぬだって？17日といたら2日後のはず…

「気味悪いイタズラだぜ……」

道に投げた携帯をそっと拾い上げる。

「あれっ？」

画面に表示されていたのは仲間と撮った画像。履歴も確認したがさっきの番号はなかった。

昨日と違う日常。

今この瞬間、呪いは始まった。

第一話 変わらない日常

7月20日午前?時

今日も朝から蝉が騒がしく鳴いている。この暑さの中ご苦労なこつた。

深い眠りについてた俺を起こしたのは携帯の着信音。最近流行りの歌が1人暮らしの俺の部屋に響き渡った。なんとか携帯を手探りで探し出す。朝っぱらから迷惑なヤローだ。快眠を邪魔され多少イヤつきながらも携帯を開く。

「なんだ、ヒロか…」

画面に表示されたのは昔からの親友の名前。

古魅宏樹。俺と同じ高校3年生で小学校辺りからよくつるんでいたやつだ。俺は起き上がると通話ボタンを押した。

「おはよっ、ユウ!」

携帯から男にしてはやや高めの通りの良い声が流れてくる。

「ん、ああ」

あまりの声の大きさに一瞬耳を離すが、なんとか返事を返す。

「今日も暑いねえ」

「そうだな…」

それからしばらくいつものようにヒロと他愛のない話をする。

いつも元気なヒロも最近の暑さには参ってるらしい。まあそれでも俺からしたら十分に騒がしいがな。話を始めて10分程経過した辺りで俺はさつきから思っていたことをヒロに尋ねる。

「んで、こんな朝早くから何のようだよ?」

「あ………」

ヒロはしまったといった様な声をあげる。明らかに動揺が入り混じった声だ。

「あのさ…ユウ」

「なんだよ？」

「怒らないで聞いてね」

「なんだよ、早く言えって」

恐る恐る話しかけてくるヒロの声はまるで悪戯がバレた子供の様だった。何か俺に怒られるようなことをしたのか？と考えるが一向にその答えは見つからない。

基本真面目なヒロは他人を馬鹿にしたり、からかったりしないのだ。

「その……ね？」

「ああ」

「授業……始まるよ」

時が止まる。ゆっくりと耳から携帯を離して画面を見る。授業開始は9時ちょうどだ。そして今の時間は…

「8時…50分……」

勉強はそこそこ出来る俺だが出席日数が異様に足りていない。低血圧な俺はなかなか朝起きられず、そのままよく学校をさぼっていた為だ。

このままだと進路に影響するので最近は何と頑張っている。

「ごめんねユウ？」

ヒロが申し訳なさそうに謝る。悪意がある訳じゃない…それはよくわかっている。それでも…

「……………な」

「え…？」

「ふざけんなっー！！」

俺は着ている服を脱ぎ捨て制服を着ると、ダツシュでアパートを飛び出る。物凄い寝癖がたっているがそれを気にしている暇はない。朝食も食べてないのでいささかパワー不足だが持てる力を前発揮して学校へと走る。そんな俺の気も知らない太陽は今日も絶好調らしい。

「くそつたれええええ」

俺は叫んだ。何故だか無性に叫びたくなつたからだ。このまま行けばギリギリ間に合うつ。人間頑張れば何とかなるもんだと1人納得する。俺は口元に小さな笑みを浮かべた。

まあ遅刻したけどな。

「はあ……」

自分の席に着いた俺は深い溜め息を漏らす。その溜め息に乗せて残りわずかな元気までもが出て行ってしまっている気がする。近寄り難いオーラを離す俺に人影が近付いてきた。

「ユウおはよう」

「おう……」

近付いてきたヒロはうつ伏せに倒れ込んで俺の顔を覗き込むように席の前にしゃがみこんだ。

綺麗に切りそろえられた茶色の髪。誰にでも優しい性格。男なのに少し可愛らしい見た目。そんなヒロは学校でもかなり人気がある。

俺も人気はあるほうだがな…何を言ってるんだ俺は……

「大丈夫ユウ？」

「何とかなあ」

俺はうつ伏せのまま右手をヒラヒラと振る。

「あ、そうだ」

「今度は何だよ……？」

「ユウ、この前の変死事件知ってるよね？」

「ああ、あれだろ？どっかの学校のプールに全身の骨が砕けた男が死んでたってやつ」

それは今から3日前の17日に起きた事件。噂では最近囁かれている「死の電話」が関係しているらしい…が、俺はあまりそうい事に興味がない。その事件もニュースでちょっと見た程度だ。

「そうそれっ」

「んで、それがどうしたんだよ？」

「そいつの友人が昨日変死体で発見されたんだってさ」

「そいつも例の死の電話ってやつか？」

「何か警察に電話があつたらしいんだ」

「何て？」

ヒロは一拍間を空けた後ゆっくり口を開いた。

「死んだはずの一樹に殺される……って」

一樹というのは3日前の事件の被害者だ。

その名前を聞いた瞬間背筋が凍りそうになった。噂好きのヒロはこういった事件によく首を突っ込むことがある。まあそのたびに俺も巻き込まれるわけだが…何故か今回は関わっちゃいけない。俺の本能が静かに危険信号をあげていた。

「ねえ、ユウは気にならない？」

「止めとけ…」

「えっ？」

その時、不意に携帯が鳴り響いた。急ぎのあまりマナーにするのを忘れていたようだ。

「誰…？」

ヒロが俺の携帯を覗き込む。普通見るか？

「…お前の妹様だよ」

画面には「未来」の名前。未来…ミクはヒロの妹で俺達と同じ学校の1年生。俺はしぶしぶ朝と同じ様に通話ボタンを押した。

「ユウおはよおお！」

ヒロに負けなくらい大きな声が俺の右耳から左耳へと突き抜ける。本当に朝から最悪だ…

「お前等は何でそう元気なんだよ…」

「ねえねえ、今日ユウの家行っていい？」

「聞けよ……」

俺は再び深い溜め息をついた。騒がしい2人に呆れつつも、何だかんだでいつも一緒にいる俺は結局こいつらが大切なんだろうと思う。

「ミク何だつて？」

いつの間にか隣に来ていたヒロが尋ねる。

「今日俺の家に来たいんだと」

「じゃ俺もユウの家行っていい？」

「何でお前までそうなるんだよ……」

「別に良いじゃん！」

隣でニコニコと笑顔を見せるヒロと携帯の向こうで叫んでるミク。

俺は何回目かもわからない溜め息をついた後、小さく笑う。

「……好きにしろ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2510ba/>

Death Call

2012年1月6日22時49分発行